グリンピース

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グリンピース

【Ｎコード】
Ｎ６２７２Ｙ

【作者名】
しゅん

【あらすじ】
純一は夜になって夢をみた。その夢は現実かのようにはっきりして毎日続きを見れている事に怖くなり悩んでいた。そのうちにその夢は息をした生き物のように別の世界に純一はドンドン引きずられていくのであった。

この夢なんだよ

純一は、ハッとして目が覚めた。何でこんな夢を見たんだろう。夢と思わない現実的なこんな夢を見たのは初めてだ。確かに夢は脳が休まずに動いている作用がきっと、リアルに見えると思うが、あれはどう見ても余りにも夢とは思えない。純一は呆然としていたが、学校に遅刻すると現実の生活にベットから起き、トイレに向かうのであった。

「よ、おはよう」
裕信が純一の肩を叩いた
「あ、おはよう」
「何かうかない顔してんな。どうかした?」
「お前さ。夢ってよく見る」
「まあ、見るけど、そうそう、俺怖い夢見た。それがさ。ガミガミ怪獣が出てきて俺はもうすぐで遣られる所だったよ」
「なんだって、ガミガミ怪獣って」
「俺のお袋。夢の中でも口煩く言ってさ。そのうち火を噴くんじゃないかって、おおこぇー。お前はどんな夢を見るんだよ」
「俺か、いいやそんなに見ないよ」

純一は今朝見た夢の話をしなかったが、言っても何か解って貰えないような気がしたからであった。純一はその夢が頭から離れないでいた。そう言えば前にも似た夢を見たことを思いだした。だが、今回は強烈であった。夢の世界で感情を持てることが不思議であった。寝ているのに心の作用が働くのは何故だろう。昔から夢に纏わる話はいくらでもあるが、また、テーマにして研究して発表をしているが、まだこれって判明がないような気がする。死と同様色々な言葉が飛び交うがこれって言う確証がないようなような気がする。

純一はごく普通の高校二年生、彼女がいる訳でもなく友達もそこそこいて、家は公務員の父を持ち、二つ下の妹がいる。毎日平凡な高校生活を送っているのであった。寧ろ何もないことが悩みのように思えて、もっと刺激的なことがこないかと思っていた。いや、ドラマのようにある訳がない。これが俺の人生なのかなと、何か夢を持つでもなく、大学へ行って社会人になって、相手が出きれば結婚もし、子供も出来て淡々とした退屈な道が持っているのかと、自分の先を想像しては、あーとあくびをしたいような毎日だと人生を達観していた。

また晩が来た。今朝夢を見たことをすっかり忘れて純一は深い眠りに着くのであった。夢の中で純一は階段を降りていた。その階段は白い螺旋になっていた。「あれ、これって同じ」と純一は気が付く。その階段を降りた先には、女の子がいた。

「こんには、純君」

「えっ、君僕のこと知っているの」

「もう、忘れた。昨日、君が言っていたんだよ。僕の名前は滝野純一ってね」

「そうだった。ってことは君と毎日こうして会っているってこと」

「そうみたい。君が夢を見てくれたらね」

「ちょっと、待ってよ。夢って同じ夢も見れないし、まして昨日の続きなんてよけいにないよね」

「まあ、深く考えるはよそよ」

「あっ、君の名前は、これも僕が訊いたかもしれいなけど」

「そうね。今度は忘れないでね。美樹」

美樹は小柄で白のティーシャツにチェックのミニスカートを履いていた。笑うと八重歯が見え純一と同じ年齢の十七歳である。

「ここって何処なの？」純一が訊いた。

野原で他に何もない。空だけが青く隅渡っていた。春の心地よい

暖かさでこの空間に安堵感を憶えるのであった。

「純君、この世界君が住んでいる所と違うの分かっている」
「えっ、て言う事は現実ではないってことだよね」
「そう。私は君が住んでいる世界にはいけないから、純君が来てくれないと私と会えないってことかな」
「でも、この世界って何」
突然美樹は大きな声を出して笑いだした。
「何が可笑しいの」
純一はムッとした顔になり、こっちが真剣に言っているのに美樹の態度に腹ただしく思えるのであった。
「あっ、ごめんね。だって、この世界って純君の世界みたいなものじゃないの。君が寝ると夢を見る。だから君が描いているのと同じだと思うんだけど」
「でも、僕には分からないよ。だって、夢って毎日同じ場面で見るだろうか、そして、僕は美樹ちゃんとこうして話している。あーわからないよ。現実か夢なのか」
純一は頭を掻き、どうなっているのか訳分からないと言う表情をみせた。

遠くからトンビの声が聞え二人の頭を飛んでいった。飛行機雲が一本斜めに線が引いて飛行機が飛んでいる。まったく現実の世界と変わらないような気がした。
「ここって、夢の世界だよね。だったら僕が行きたい所へでもいけるの」
「そうだよ。そんなこと朝飯前だよ。空だって飛べるし、世界の何処でもいける。時代も過去も未来だって、自由じだいだよ」
「そうか。でも、よく分からないよ。僕が不思議なのか。君が不思議なのか」
「くっす」美樹は笑った。

「えっ、何」
「だって、この世界は純君の世界なんだよ。だから純君が自分のしたいことをし放題だよ」
美樹は下向きに顔をして分かってないよなってでも思うような顔した。美樹は背を向け歩き出した。その後に純一が美樹を追いかけていくように付いて行った。何処からきたんか真っ白に蝶が飛んできたと思った瞬間一面が名の花畑に変わっていた。美樹はさっさと歩いていくので、菜の花畑の中に紛れてしまい行方を失ってしまった。そのとき純一は目が覚めた。
朝になってカーテンの横から朝にの光が差して純一は寝とぼけた顔をしてボーとしていた。まだ、鮮明に夢が頭の中に残っている。いったい続いて同じ夢を見るんだろう。美樹って誰んだよ。これって怨念?亡霊、幽霊って言う類。僕は何かに取りつかれているの。

夢って見るの、叶えるのどっち？

今日は学校の休み土曜日だ。純一はパジャマのままでリビングにいき、テーブルの椅子に座った。父修二がすでに座って新聞を見ていた。

アーと大きな口を開けて純一はあくびをした。

「お前は進学を考えているんだろうな。お父さんお前の口からどこの大学へいくのか聞いていないぞ」

「そこそこの所に受験するよ。別にどこへ就職って考えてないから、親父見たいに公務員にでもなるかな」

「簡単にいってくれるなよ。役所で働こうと思ったら、倍率が高いからなかな入れないぞ」

「そうよ。あんたのレベルだったら厳しんじゃないの」

母麻美が台所から朝ご飯をテーブルに置いた。麻美は昔からあまり勉強のことは言わない方で、放任主義なのか麻美の性格なのか、その為子供達はどこか余所の子に比べるのんびりしている所があり、家族の中で一番のんびりした者が階段を降りて、リビングに入ってきた。

「おはよう」

妹の美菜が椅子に座った。

「美菜。昨日帰ってくるのを遅かったが、本当にミクちゃん所で勉強しているの。あんたこそ受験はまじかで大丈夫なの」

「ちゃんと勉強しています。でも、私って今の所の成績なら、そこそこいけるでしょう」

「うちはそこそこって言うのが多いわね」

麻美は純一の顔見た。純一は飲んだ牛乳を吐きだした。

「もう、お兄ちゃん汚いんだから」

「ほんとだ。溢すなよ。うちの子達は呑気だね」

「そう言っている。お父さんも私達に言えないと思うけど」
「それはどう言うことだ」
「だって、お母さんが言ってたもん。大事な書類を忘れて役所に行ったって、お母さんがテーブルに置いてあるのを早く気が付いたから、会議に間に合ったんでしょう」
「親父も僕達とそんなに変わらないよな」
「本当に助かったよ。お母さんには、あれがなかったら会議で困る所だったよ」
　修二は失敗を暴露されても怒らず、寧ろ妻に感謝の意を述べる所が純一も美菜も好きだった。何よりそう言う所に惚れているのは妻の麻美だった。純一の家庭はごく普通で穏やかで波風もなく、平凡な生活を送っているのであった。
「えっ、今日は役所休みでしょう。仕事へ行くの」
美菜が言った。

「ああ、役所は休みだが、こっちはしなければいけないことが山程あるんでね。休んでいられないんだよ」
「役所勤めも大変だね。僕公務員やっぱ止めようかな」
　純一はトーストのパンをかじりながら言った。
「そんなこと言っていたら、あんたどこも就職出来ないよ」
　麻美は言葉ではあまり言わないが、内心では純一のことは気がきではなかった。麻美の母は神経質の人で、その度に今日はどこへいくの。成績がちょっとでも下がったら、なぜこんな成績になってしまったのかと必こい位に訊いてくることが、思春期だった麻美はかなり辛い思いをしてきたので、子供達は心配だが自分の思いをぶつけるのはよそうと思い、ガ―と言いたいときは一呼吸して話をするように心掛けていた。

「そうだよ。お兄ちゃんもちゃっとは勉強しに図書館に行ったら」
「お前から言われたくない」

純一は美菜から言われてムッとした顔した。修二がリビングから出って仕事へ行った。
「な、お前に訊きたいことあるんやけど」
「エッチのこと」
「馬鹿違うよ。お前、夢って見る」
「夢はよく見るよ。それがどうしたの」
「じゃ、同じ夢で毎日続きもの見る」
「何それ、あるわけないじゃん。えっ、お兄ちゃんあるの」
「うん。僕さ。三日前から同じ子が連続で出てくるんだよ」
「うそーそれって夢じゃなくて、呪われているよ。ウワー怖いよ」
「やっぱ、幽霊的なものなのかな」
「その夢覚めたあと金縛り状態になっていない」
「いいや。普通に目は覚めて誰かが乗っているよなことないけど」
「私分かんない。でも、普通ではないよ。あっ、ミクちゃん所へ行かなきゃ」
美菜は朝食を終えて、ダイニングルームを出て二階に上がって行った。純一は右手を頬に当て肘をテーブルに乗せて考えていた。

麻美がダイニングに入ってきて「どうしたの。純一何か深刻な顔して、さっきの話ちょっと言い過ぎたかな。あんたもそれなりに進学のことは考えているわよね。お母さん純一なら、きっと頑張ってくれると思っているし、信じているから余り進学のことは口にしなようにしてるつもりなんだけどね」
麻美は煩い親にならないように、子供達に気を使っているが、当の本人はそのことは何も気にしなく、夢の美樹が気になって仕方なかった。しばらくして純一は「えっ、そんなこと僕は全然気にしてないよ。どこの親でも進路は口煩く言っているだろうし、僕は寧ろお母さんの子で良かったと思っているよ。僕達の気持ちに任せてくれるから、寧ろ親を裏切ったら申し訳ないと思うよ。ありがとうお母さん」

麻美は微笑んで薄ら涙を見せるのであった。こんなにも優しい言葉を掛けてくれる我が子が嬉しく、自分が育ててきたことは間違えない。譬え、受験を落ちたとしても焦らず子供達を信頼して見守って行こうと思っていた。

だが、純一は要領もよく世渡り上手な所もあった。友達は塾へ行っているし、部活は英会話部に入っているので休みに練習があることもなく、勉強をする気分じゃないが暇なので図書館へ行くことにした。

初めは純一は参考書を広げて勉強していたが、一時間もしない内に疲れてきて、自動販売機でコーラを買って休憩場で飲んでいた。ふと純一は夢に関する本はないか調べたくなった。

人はなぜ夢をみるのか、夢は欲求不満の表れ、人間の心には自分で意識出来る顕在意識と、自分でまったく意識出来ない部分潜在意識の二つがある。顕在意識では脳がストップをかけていた行動を、潜在意識の中では思い切って実行していまった。普段から恋人がいない場合、普段は意識してなくても、心の奥底では寂しい自分がいてそれが夢に現れる。欲求不満だけではなく、日常生活を送っていく中で、多くの人と言葉をかわたり、新聞、テレビ、雑誌などから膨大な情報のうちの一部が何かのきっかけで夢に登場していると考えられます。

なるほど、では僕は欲求不満。彼女がいないことを寂しく思っている。それで、美樹が夢の中に現れるの？なのかな。でも、僕は今の所彼女が凄く欲しい訳でもないのにな。
あー分かんない頭がおかしくなるよ。これを否定すらなら、やはり心霊、スピリチャー系前世、先祖、考えれば考える程頭が纏まらない。純一は本を見るのを止めて図書館から外にでた。

そして晩になり、たまたまで何も気にするとことはないさと純一は眠りに付いた。
　ここはどこだろう。と純一は夢の中で考えていた。すると大きなボールの上乗りころがしながら向ってくるのはサーカスのピエロがきた瞬間にメリーゴーランドが廻っている。馬の乗り物に美樹が乗っていた。
「純君も乗らない」
「えっ、僕が」
と言っているといつの間にか僕も乗り物に座っていた。
「なぜ、君が僕の前にこうして現れるの。君っていったい誰なんだよ」
「うふ、私の世界じゃないってば、純君の世界よ」
「僕の世界でもないよ。僕は彼女が欲しくて欲求不満でもないし、まして寂しなんて思ってもいないよ」
「私はあなたの世界には行けないのよ。いや、私はあなたの世界では住めない」
「じゃ、僕が君に会いたい為に君の夢の世界に来てるってこと。また、訳の分からないよ」
「じゃ分かるようにしてあげる」
「どう言うこと」
純一が言うとメリーゴーランドの馬が本当の馬に乗って走っていた。その後ろを美樹も馬に乗っていた。馬は草原のような所を駆け出している。

「えっ、何処へいくの」
「大丈夫よ。純君は何も考えずに馬のしっかり掴まっていて」
　馬は凄いスピードを上げて駆け出した。野を走り谷を走りときには海の浜辺を走り抜け走っていると言うより、飛んでいるような感じであった。
「ちょっと待ってよ。えらく早いよ。怖いと言う感覚はないが、走

り過ぎじゃないの」
純一は馬にしがみ付いていた。馬はまるで羽根が生えたドラゴンのように森に入っても木を倒して次から次と「これって、ダンプ？」息も付くことなく馬は走っていた。やっと、馬は止まった。
純一は馬にしがみ付いている為、止まっていることも分からなかった。

「純君。着いたよ」
美樹が純一の方にきて声を掛けていた。純一は顔を上げた。そこは高い山と山の谷間にいた。何軒か家が並び立っていた。ここは何処なんだろう。
「ここは私が暮らしている所よ」
「美樹ちゃんの住んでいる所なの。君って田舎に住んでいるんだね。親と一緒なの」
「そうよ。両親に兄弟六人に親戚達は隣り居るわ。さあ、来て」
美樹は純一の手を引っ張るように強い力で連れていくのであった。
「おい、そんなに引っ張らないでよ」
女の子なのに凄い力に驚き、純一は美樹のままに抵抗も出来ずに、美樹が住んでいる村のような所に連れていかれた。

恋の反対は残酷な試練

「お母さん、お友達を連れていきたよ」
美樹は家の中に入っていった。純一はおどおどして家の前で立ち尽くしてした。
すると、とても綺麗女の人が家の中から出ってきた。
「さあ、家の中へお這入りなさい」
優しく手まねきするよに美樹の母麗美は純一に声を掛けた。純一はすっかり夢の世界を忘れて家の中へ入った。中に入ると大きな暖炉があり、そこにはダ二ングのようにソファもなく、輪になって何人かが大きな絨毯がひかれている所に輪になって座っていた。純一が入と一斉に皆は純一に注ぐのであった。

「私の友達の純一君」と美樹が紹介した。
「あの、僕は磯崎純一です。よろしくお願いします」
「ああ、私は美樹の父親で庄次と言います。まあ、そこに座って下さい」
美樹の父庄次は凄く気柵に純一を迎えた。純一は恐る恐る正座をした。
「純一君。ここでは正座は無用だよ。足を投げ出してもいいし。疲れたなら、体を横になって寝そべてもいいんだよ」
「そうよ。お父さんが言うようにここは気楽にいればいいんだから」
美樹が言うと他の者も頷いていた。

「僕は美樹の兄の誠司です」
「僕は弟の祐司です」
「わしは祖父の漸次と言います」
「私を入れて六人家族なの」
「さあ、お茶でも飲んでくださいな」

と母麗美がお茶とお菓子を持ってきた。
純一は肩を竦めて「ありがとございます」と麗美に言った。
ここに家族は穏やかで何だか自分の家族に似ているような気がすると純一は思った。友達の裕信が純一の家は羨ましいと遊びにきては言っていた。あまり煩く言わないお母さんにお父さんも穏やかに優しそうで妹とも仲がいい。俺の所とおお違いだと裕信の口癖でもあった位、純一の所は素敵な家庭のモデルで、いつも気持ちいい風がさっらと吹くような感覚がするのであった。

「こうやっていつも輪になって話をしているの」
純一は何げなく訊いた。皆はニコニコと笑い頷いていた。
「そうよ。色んなことを話すのよ。私が外へ出掛けたら、こんな花が咲いていたとか、今日はこんな景色の場所へ行ったとか、純君と友達が出来たとかね」
美樹は純一の顔見てウィンクをした。純一は行き成りそんな顔されて照れて下を向いてしまった。美樹を意識しているような気持ちを感じるのであった。純一は現実を忘れて、この世界に入っていまったのであった。
「ここは、昼間は暖かいんだけど晩になると気温が凄く低くなって寒いから暖炉に火を熾すのよ」
「へ―そうなんだ。そんなに気温の差が酷いなら風邪を引いてしまうね」
「大丈夫なの。私達はずっとこの環境だから免疫力が付いているから、でも、純君は気を付けなきゃね」
「ねぇ、馬に乗って遊ばない」
「えっ、あの馬に・・・」
「大丈夫よ。さっきみたいに走らないから」
「では、純君と遊んでくるね」

美樹は皆に言って僕の手を引っ張って家から外へ連れて行った。

純一は行くとも何も言っていないのに、美樹はマイペースであった。まるで妹の美菜みたいなと純一は心の中で呟いていた。
「さあ、馬に乗って」美樹が言った。
外に出ると既に馬がいた。二人が出掛けることを分かっていたように待機していたのである。純一が馬にまたがると美樹も後ろに乗った。美樹の手が純一の腰に掴み、体は美樹とペタとひっ付いていた。純一は胸はときめいていた。
えっ、これって僕は美樹が好き。まさか、純一の胸の奥から声がしたような気がした。純一はまだ恋と言う恋はしたことがなかった。

初恋なのか少しだけキュンとしていた子はいた。小学校六年のときだった。まだ気持ちが幼い為それが恋とは思えずに、自分でも気が付くこともなく過ぎてしまった。中学校に入ってもバスケの部活と友達で遊んでいる方が楽しくて、思春期な恋の芽生えは訪れず高校に入っても女の子には興味はあるが、特定的に好きになる子はいなくいたのであった。
だけに、こんなに近くに女の子と接近するなんて純一の胸は高鳴り躍っていた。

馬は行き良いよく走り出し、天まで行きそうな力強く飛び出るのであった。
「ウワー最高―馬が走る瞬間って大好き」
美樹は純一に掴まってはしゃいでいるのであった。純一は馬に慣れてないせいもあって怖く顔を下に向け目を瞑っていた。
「あれ、純君もしかして怖がっている」
「全然、怖い訳ないでしょ」
「なんて強がり言っちゃて」
美樹は純一をからかうのであった。

まるで恋人同士のような純一は気持ちの中では美樹はかなり占めて

いた。そして、体がひっ付く感じも何とも言えない甘い香りがして、シャンプーの香り、女の子に臭いってどうして優しくファーとしているのかな。今度は怖い動悸ではなく、胸がトクトクワクワクと嬉しく鳴るのであった。馬は草原を掛け走った。初め乗ったときの速さではなく、風が心地良く吹き爽やかな気分であった。まるで映画かドラマのワンシーンのようなこれこそまさしくツゥーショット。

純一はこれが恋愛なんだと幸せを感じていた。僕はやはり美樹のことが好きだ。訳分からないがこの気持ちは今まで味わったことがない。このままずっとこうしていたい。

「純君。何か言った？」

「えっ、何も言ってないよ」

「そう。聞えたような気がしたんだけど」

まさか今の僕の心の声が聞えたなんてありえないよな。純一は呟いた。何か美樹は人の心を読むような鋭さを持っているのに、純一は怖さを感じるのであった。

馬は海に来た。波際を走っている。美樹は僕の腰に掴まって喜んでいる。そのとき、この笑い方は誰かに似ていると思った。そうだ。美菜だ。げっ、何であいつが浮かぶんだ。純一と妹の美菜とは兄弟と言うより、友達のような感じであった。

思っていることは何でもいいあえる仲で、美菜は好きな男の子がいることも純一だけには言っていた。

そのとき景色が変わった。一面に桜が咲いていた。そこを馬が走り、風が吹くと桜吹雪が舞いあがり幻想的な世界に包まれるのであった。地面は桜の花びらが敷きしめられてまるで桜の絨毯のようになっていた。馬はテンポを抑えてゆっくり歩き出した。純一の気持ちを分かっているかのように素敵な状景を演出しているように思えるのであった。

「純君、私のことどう思う」
「えっ、どうってとても大事な友達だよ」
「私は純君のこと好き」
美樹は純一の背中体を持たれかかった感じに、純一は緊張し熱いものを感じていた。
これって告白？

このときはやはり男の方からキスをすべきなんだろうかと思わず考えてしまった。馬は止まった。瞬間美樹は純一の前にきて、純一の胸に顔を埋めてきた。
純一はそっと美樹の唇に触れた。
「僕達はずっと一緒にいようね」
「そうね。出きることなら純一と一緒にいたい」
「美樹僕も大好きだよ」
熱い接吻を交わした後、純一は美樹を抱きしめた。女の子とこんことは初めてなのに余裕でいる自分が不思議であった。いつの間にか景色は変わり雪が木々に掛かって銀世界になっていた。

「なぜだろう。寒くないのは」
「それは、二人でこうやって抱き合っているからよ。純一の体暖かい」
「美樹の鼓動が聞えている。僕は君を愛している」
「本当に？」
「本当だよ」
「でも、愛って美しものじゃないよ。どんな障害も苦難も乗り超えた者達が獲得出きるのよ。壊れない絆を手にするの。そんな愛を私も欲しいって言ったら、純一は私にくれる」
美樹に言われて純一は理解が出来なく何て答えたらいいの分からなかった。
「くれるって言われても、愛って時とももに二人で築いていくもの

だから、物じゃあるまいし行き成りはいどうぞって訳にいかないよ」
「そうね。でも、この世界はそうじゃないわ。行き成りだろうか可能なの。純一のｙｅｓなのかｎｏなか訊きたいの」
「じゃ、僕がｙｅｓって答えたらどうなるの？」

純一は何か怖くなった。まるでバーチャル世界でゲームの始まりのような気がした。美樹は純一の目をじっと見つめていた。見つめられた純一はまるで美樹の魔法に掛かったようになって「分かったよ。ｙｅｓって答えるよ」と思わず口にしてしまった瞬間、地面二つに割るように崩れ、純一はあーと声を上げ叫び体毎落ちてしまった。

純一は大きな岩のような物がある所に落ちてしまい。そこには馬も美樹もいなかった。
暫らくして純一は意識を戻した。
「ああ、頭が痛い」
純一は頭を押さえながら上半身を起こした。ここって何処？そこは何もなく地面でもなく、まして山にいるでもなく、大きな岩みたいな物が重ねあった所であった。
美樹はどうこへ行ってしまったんだろうと思ったとき、ウ―と声が微かに聞えた。
声の聞える所に恐る恐るにいくと、美樹が倒れていた。

「美樹、大丈夫しっかり」
純一は美樹を抱きかかえ軽く頬叩いた。すると美樹は目を微かに開けた。
また、純一は美樹に声を掛けると美樹は「純一」と言って起き上がってきた。
「大丈夫なの」
「何とか大丈夫みたい」
「ここってどこか分かる？」

「私も分からない。ここってどこなのかな」
二人はブラックホールに落ちたように、誰もいない所で二人は呆然としていた。

僕達一体どうなるの

純一は美樹を支えて立ち上がった。二人はふらついたで歩きだした。
純一は頭を強く打ったせいで頭がくらくらするのであった。だが、ここで埋まっている訳にいかないと自分に言い聞かせて、この先はどのようなことが待っているのか不安に駆られながら美樹の手を引いて歩きだした。歩いても歩いても岩場の所しか出てこなく二人は疲れてしまった。

すると、一人の老人にであった。その老人は腰が曲がっていて杖を持って真っ白な頭の毛に髭は白く顎の下まで伸びて、服装は足元が少し見える白色の布を身に纏い、まるで仙人のようでもあった。
「あの、おじいさん教えて下さい。ここはどこですか」
「ああ、ここは端じゃ」
「端ってなにの？」
「さあ、なんせ端なんじゃ。お前さん達に言っておくこの先は険しく大変な所ばかりじゃ。中途半端な気持ちなら行くのは止めた方がいい。でないと命を落としてしまうかもしれない。それぐらい大変なんじゃ。だが、それを乗り超えると掛け替えのないものを手にすることが出来るだろう」
と言ってお爺さんは去って行った。

「えっ、どう言うことなんかな」
「さあ、私にも分からない。でも取り敢えず先に行くしかないわよね」
「確かにこうしていても仕方ないし」
二人はまた何もない岩ばかりの所を歩きだした。そのうち日が段々強くなり灼熱のような状態に純一も美樹も倒れそうになっていた。

「助けてくれ水、水が欲しい。このままだと脱水状態になって死んでしまうよ」
「しっかりして純一。大丈夫よ。もう少し行けば必ず水のある所に行けるわ」
「絶対にいけるの。美樹もこの場所が分からないのにどこに確証があるって言うんだよ」
純一は疲れていたのと、喉の渇きに耐えれない気持ちが苛立たせて怒った言い方をした。

そのとき女の子がやってきた。
こんな所でこの子はどうしてと純一は思ったが、意外とその子は平気で歩いていた。
その子とすれ違うときに純一は「水はどこにある」と尋ねてしまった。女の子は「水そこよ」と指を差した。女の子が指を差す方を見ると小さな泉が見えた。純一と美樹無我夢中で全力の力を振り絞って女の子が教えてくれた泉まで辿り着いた。

二人は飢えた獣のように水を飲み、命にエネルギーを補給するようにむしゃぶって飲んだ。純一は頭ごと泉に押し込んだ。
「あー助かった。こんなに水が大切とは思ってもいなかったよ。普段は水道をひねればいつだって飲めるし、夏はおふくが冷蔵庫に麦茶を入れてくれているので、それがあたりまてとして飲んでいたが、水の有り難さを心から感じるよ」
「そうね。本当はあたり前じゃないのよね。無くして初めてその事に気が付くってことが多いと思うわ。だがら普段からそれを重大化していく意識が大事なのかもね」
美樹の言葉に説得力があり、体験してその通りだと純一は大きく頷いていた。

そしてまた二人は道なき道を歩いていた。いつの間にか灼熱の熱さがそれ程でなくなっていた。岩ばっかりの所も無くなって、何もない草原の道に着いた。
「やっと、普通の所に戻って来た感じね」
「ああ、でもこの先何が待ち受けているかと思うと怖い気がして」
「純一って、意外と気が弱いのね」

美樹から軽く言われて、純一はムッとした顔になった。度胸がそんなにある訳じゃないが弱いと好きな子から言われると男であると言う所を見せてやろうじゃないかと純一は意地になってさっさと歩き出した。
「純一待ってよ。怒っているの」
「いいや。怒ってなんかいないよ」
と純一が言って振り向こうとしたとき、大きな物体が空から落ちてきた。
「ウワーなんだよ。もう少しで頭に直撃しそうだったじゃないか」
純一は尻餅を付いた格好になってしまった。
「純一大丈夫」美樹が駆けつけてきた。二人は落ちてきた物体を見つめていた。
「これってなんだろう。何かの卵？」
「私にも分からない。岩石の欠片かしら」

その物体は丸くツルッとした感じに灰色をして、直径一メートル位の物体で軽いのか重たいのか分からず、何かの卵か何もない物体なのか、二人は恐々その物体に近づいてみた。美樹はその物体にそっと触ってみるとメキメキとひびが入り「きゃー」と声を上げて尻餅を付いてしまった。
「やばいよ。これって恐竜の卵じゃない。もうこんな物ほっておいて早く逃げようよ」
純一の体は震え逃げ腰でいた。だが、美樹はこの妙な物体に興味

があり触れていた。
そのとき、もっとメリメリとひびが酷くなりその内パッカと穴が開き、初めは小さな穴が段々大きくなってきて、中に何かの生き物がいる。二人は息を飲んでその卵か訳の分からない物を見ていた。
　すると暫らくすると勢いで外の殻が割れたように、中から飛び出してきた。それは全体的に黄色い毛に覆われた鶏の雛のかなり大き版と言う感じであった。そのひよこの大き版は起き上がってぴょんぴょん跳ねていた。その歩き方や表情が愛らしくいた。二人は安心して笑い出した。

「可愛い。おいでこっちに」
　美樹は小さく体を屈めてその生き物に手を広げて呼んでいた。純一は大丈夫かなとまだ恐々な様子であった。するとその生き物はぴょんぴょんと跳ねて美樹の方にやってきてピーピー鳴いていた。純一もその可愛いさに負けてその生き物に触ってみた。
「これてって、何の動物の種類なのかな」
「そうね。きっと羽根の覆われているから鳥の仲間なんじゃないかな。きっとどこかに巣を作っていて誰かが盗んでしまい、だが、あまり重たいから落としていまったとか」
「なるほど、では、この生き物に名前を付けないとね。うーん。ぴょんぴょん飛び跳ねるからピョン太って言うのはどうかな」
「いいね。可愛いピョン太。君は今日から私達の仲間だよ」
「えっ、このピョン太連れていくの」
「そう、ダメだってこのまま一人にしておいていけないよ」
「でも、こいつどんなに大きくなるか分からないのにこれから旅に邪魔になるよ」
「純一って冷たいんだね。そんな冷たい男とは私の方から一緒に行きたいと思いません」
　美樹は完全に怒ってしまった。純一は女の子って厄介だなと思い。

まるで美菜だよ。
あいつも直ぐにすねて怒りだすんだ。僕が冗談で好きな男子は美菜以外に好きと思っている子がいたりしてとからかう気持ちで話したら、二、三日口訊いてくれないんだから、女の子の気持ちは分からないよ。と思っている純一も美菜のことが妹以上の感情を持っていたことを自分でも気が付いていなかった。そして、ふと純一は家族のことを思い出していた。

皆心配しているだろうな。僕がこんな所にタイムスリップしていまったから、捜索願いを出しているかな。もしかしてこのまま僕は二度と住んでいた所に帰れないのかもしれない。そう思うと何か苦しく切ない気持が出てくるどうしたんだろう。今までは美樹ということで何も考えていなかったのにホームシックに掛かった感じで家族の元に帰りたいと強く願うのであった。

「どうしたの純一。悲しそうな顔して」
「いや。別に。分かったよ。ピョン太を連れて行けばいいよ。その替わりピョン太は美樹がしっかり守ってあげてよ」
「じゃ、私は純一守ってくれるの？」
「勿論」
「何か、その言葉弱いな。何か起きたら私達を置き去りにしてサッサと自分だけ逃げるじゃないでしょうね」
「馬鹿な。僕はそんなことはしないよ」

だが、そう言いながらも本当の所は美樹の言っていることがずばしかも知れいないと内心はそう思う純一であった。意外と純一は臆病の所があり、小さきときに遊園地のおばけ屋敷に入って一番に先に泣きだすのは純一であった。その為か今だにお化け屋敷に入るのは苦手で行こうとはしない。純一の部屋に直ぐ近くにトイレがある。寝ているときにガッタっと音がすると必ず美菜の部屋に行く「あれ、

お兄ちゃん怖がっている」って美菜からからかわれる位度胸はないことは純一本人もそのことはよく分かっていることであった。
「さあ、行くよ」
美樹はそう言ってサッサと歩いて行った。その後をピョン太も跳ねて付いていく、美樹はかなりマイペースだと思い、美樹の子分のように付いていった。

どの位歩いたのか白い靄が掛かってきたと思っていたら、霧のように真っ白になってまったく前が見えなくなってしまった。
「何だよ前が見えないよ。美樹いる」
「私はここにいるよ」
美樹は純一の腕を掴んだ。
「えっ、美樹はこんな霧で真っ白なのに見えるの」
「うん。はっきり見えるよ。きっと純一と体の作りが違うかもね」
「何それって、人造人間見たいでね」
「でも、それに近いかもね」
そうか、美樹は僕の体とは違う作りになっているんだと、少し気味が悪い感じがして純一はブルンと体を揺すぶった。そのとき男の人のような声が聞えた。その声段々こっちに近づいてくる感じであった。
「助けてくれー」
「美樹誰かこっちに来る。僕はまったく見えないが、美樹は見える」
「見えるよ。やせ細ったって服はボロボロになって今にも死にそうな人が歩いてくる。後にこの人を追いかけくる奴がこっちにくるかも、私達もここに居てたら危ない。さあ逃げよう」
美樹は僕の腕を掴み走り出した。僕は先の見えない霧の中を美樹を頼りに走るしかなかった「大勢の者がこっちにこっちに向っている。こっちに隠れよう」と美樹は隠れがを見つけたにか僕達はそこに待機した。
「真っ白で何も見えないから怖いよ」

「あっ、そうだこのメガネを掛けてみたら」
美樹は僕に眼鏡を渡してくれた。僕はその眼鏡を掛けて見た。すると不思議に白い靄で見えなかったのが赤外線のようにはきっり見えるのであった。

「ここって洞窟見たいだけど、不気味だな」
「でも、ここに隠れていたら安全だと思うよ」
「でも、さっきの男の人はどうしたんだろ」
「きっと、奴隷にされて逃げ出してきたんだろうね」
「奴隷、僕はよく分からないが昔は戦争とかで捕虜になった人とか、植民地で居た人とかを学校の授業で習ったことがあるけど、そう言うことなの」
「そう。ここはきっと地獄谷かも知れない」
「えっ、地獄谷何それ凄く怖い名前だね」
すると、大勢の者がこっちに向って歩いてくる足音が聞えてくる。そして、
「早く歩け」と大きな怒鳴り声が響いている。純一は怖くなって体を震わせていた。
「大丈夫よ。ここでじっとしていれば見つからないわ」

美樹は純一の手を握りしめた。ピョン太も危機感を感じるのかじっとして鳴くこともなかった。
洞窟の少し離れた所から老若男女が歩いていた。その人達は疲れきっていた。思わず倒れる年寄りがいたとき、看視の者が来て倒れた年寄りのお腹を蹴りあげ「早く起きろ」と怒鳴っている。そして、看視は何度も何度もその年寄りを蹴りあげた。年寄りは体をビクビクさせて、その後は動かない状態になってしまった。
純一は見てれない気持ちに思わず顔を下に向けていた。看視が鞭でしばいている音に老人の悲鳴が狂った音のように響き渡る度に純一は震えていた。

平和だから暖かさを感じれるだよ

大勢の者が強制的に歩かされていた。なぜこの人達はこんな辛い目に合わせられるのか、出きることなら助けてあげたいが、自分ではどうしてあげることは出来ない、と思う気持ちの裏腹にここから早く抜け出したい気持ちに、駆られている自分が情けないと思う純一であった。暫らくして大勢の列は途切れて誰もいなくなった。

「外は誰もいなくなったみたいね」
「本当に誰もいないかな」
「ただ、横たわっている者は何人かいる見たいね」
「美樹の目ってここからも見えるの」
「そうよ。半径一キロ先まではそこに塞がっている物があっても、透視して見えるのよ」
「へーそうなんだ。羨ましいけど、あまり見えすぎると怖いな」
「さあ、行こう。もう皆いないみたいだし、ここにこうしていてもしかたないし」
「うん。でももっと怖いことが起きるんじゃないかって・・・」
「怖いの。だったら純一一人でここに居ればいいよ。私は先に行くからピョン太おいで」

美樹はいくじなしとでも言いたいように、怒った態度でピョン太を連れて洞窟から外へさっさと行ってしまった。一人取り残された純一は女の子はそうして直ぐに怒るんだから、美菜にしてもクラスの女子にしても、こちらが穏やかに話しているのに、あっちは直ぐに感情的に話してくる。何が気にいらないのか本当に女子の気持ちは分からないよ。
純一は疲れたのか足を投げて横になってしまった。暫らくしてやっぱり美樹が気になり純一も洞窟の外に出てみた。そこには既に美樹

の姿がなく、何処へ行ったのか純一は不安になっていた。どっちの方向へ歩いて行けばいいか分からないが、取り敢えず歩くしかないと北向きに歩いていった。空はどんよりした曇りでまるで灰色の空であった。さっき長い列で強制的に歩かせられていた者が看視に打たれたのか倒れていた。中には体がピクピクしている者もいた。まだ息がある見たいだが純一にはどうしてあげられることも出来ずに、酷いことをするんだと思うしかなった。純一は何もない草原を歩いていた。すると、ピョン太がピョンピョンと跳ねてやってきた。

「ピョン太。ここにいたのか。美樹はどうした？」
ピョン太は「ピーピー」と鳴いて純一との再会を喜んでいた。どこともものなく美樹が姿をあらわした。
「えっ、美樹いつの間にか、どこから来たの」
「もう、気が付かなかったんだから、ずっと、純一の後ろを付いていたんだよ」
「うそー」
「僕、弱いかも知れないけど、でも美樹を守りたいと思っているよ」
「うふ、ありがとう」
美樹は僕の唇に軽く重ねてきた。僕は照れて下を向くとピョン太が僕の顔見て笑っているようにみえた。二人は仲直りをして、また歩き出した。すると雨がポツポツと降り出し、その内激しい雨になってきた。純一達は急いで雨宿りを探した。そのとき一軒の小さな家が立っていた。

「あそこまで行って雨が止むまで中で居させてもらおう」
純一は美樹の手を引いて走った。その後をピョン太も跳ねて付いていった。
「すいません。誰かいませんか」
美樹は家のドアを叩いた。すると中から人がくる気配の音がした
「はい、ちょっと待って下さい」

と言って五十半ばのふっくらした女性が出てきた。
「突然すいません。僕達雨にあってしまい雨が止むまで家の軒先でいいので置いてもらえないでしょうか」
「あれあれ、こんなにずぶ濡れになってさあさあ、家の中に入りなさい」
女の人は優しく言って純一達を家の中に入れてくれた。

「さあ、このタオルで拭いて」
翔玲はタオルを二つ程持ってきて純一と美樹に渡した。美樹は自分の髪や服などをタオルで服とピョン太にも拭いてやっていた。タオルを拭いてもらったピョン太は「クッシュン」とくしゃみをしていた。
「この子はくしゃみをするの。可愛いね」
翔玲は微笑んで優しい眼差しで言った。純一はふと母を思い出した。母麻美は翔玲より若いが眼差しが似ている気がした。
「さあ、中に入って」

翔玲の家は土間があって奥は台所になっていて、居間は井炉裏になっていた。天井は高くまるで昔の家みたい純一はほっとして安堵感を憶えるのであった。純一と美樹は居間に上がらせてもらい、ピョン太も純一の横にきてちょこんと座っていた。
「おとなしくいい子だね。名前は何ていうの」
翔玲はピョン太にむかって話していた。美樹が代わりに「ピョン太と言います」と言った。

「へーあんたピョン太って言うの。本当に可愛い子だね」
そう言われているピョン太はぽっけとした顔してピーピーの鳴いた。
「さあ、食べなさい」と言って翔玲は純一達に井炉裏で焼いていたお餅を平らにしてその上に味噌をのせて棒で付いてある食べ物を出

してくれた。純一達は腹ペコで遠慮なく頂いた。
「ピョン太ちゃんはミルクでいいかしら」
と言って器にミルクを入れてピョン太の前に置いた。ピョン太は初めはクンクンと鼻を動かして確認していたが、大丈夫と思ったのかペロペロの小さい舌で飲んだ。純一達もお餅のような食べ物を口にした。お腹が空いているせいもあってパクパクと食べいた。

「どうしてここに来たの」
「道に迷ったんです私達」
「でも、早くここから違う場所に行った方がいいわね」
「おばさんはどうしてここに住んでいるんですか。他に家もない所で」
「ええ、夫を待っているの。必ず帰ってくると言って二人の奴等に連れて行かれたわ」
「そう、ここに来る前に行列で大勢の者があ歩かされていて、歩くのを止めると鞭か足蹴りされていて、その中で死んでしまった人がいたが、どうしてあんな酷いことをするんですか」

純一はこんなことを目の前でみたことがなく、平和の生活で生きてきただけに今起きていることが信じられなく必死で翔玲に話すのであった。
「ここは罪を犯した者がくる所で、自分がしていなかっても親族、親戚が少しの罪を犯していると捕まってしまうのよ。夫も自信は何も悪いことをしていないのに、叔父が一個だけお菓子を盗んでしまったの、きっとお腹が空いていたんでしょ。その罪は親族全体に掛かってくるのよ」
「なぜ、おばさんは捕まらなかったのですか」
「私は嫁だから血縁はないでしょ。あいつ等は血の繋がりにこだわるの。一人の者に対しての血の繋がりを探して徹底的に探し出して捕まえにくるのよ」

「怖い奴等なんだね。あいつ等は警察？」
「いいえ。元々は奴等は違う星の者で、だが悲しいか私達の上に立つ者がしっかりしていないから奴等に戦略されてしまったのよ」
「そしたら、いいなりにならずに奴等と戦ったらいいのに、どうしてしないの」
「私達には武器がないわ。あいつ等は武器を持っている」
「銃」
「いいえ。もっと強力なレーザ光線で打たれたら一発で死んでしまうの。だから叶う訳ないから私達はいいなりになるしかないのよ」

純一も無力だと思っていた。武器の前には持っていない者は何をしても勝つことは出来ない抵抗出来ない、ふと日本も何十年前は戦争をして国の言いなりになって、いやでも徴兵の紙が送られてきたら戦争にかつぎ込まれて、また子供から全ての人が攻撃に負けて死んでしまった。純一は平和な時代に生きているので、おばさんが言うことも、さっき見た光景も直ぐに受け止めることが出来なかった。いや、自分としてどうすればいいかさえも考えれない。どうして人は殺すんだろう。同じ人間として産まれて来て殺したら殺される。そこには何も産まれることはないのに、純一の中でぐるぐると駆け廻っていた。

「純一どうしたの。黙り込んで」
「僕には分からない。誰も殺されずに平和でいられるのはないのかと」
「そうね。私達はもう諦めているわ。生きることを、ただ、私はもしかしてあの人が帰ってくるのではと思うだけで生きて生きている。いや、どっかではもう殺されている。もうここには帰って来ないって分かっているのかも知れないが、私もいつかは殺されると思うがそう言う風に思っていないと怖くなるのよ」
「そうですね。その気持ち分かります。私の祖母も連れて行かれて

しまって、祖母はある人の罪を被って、覚悟して行かれた。でも、もしかして帰ってくるって信じているんです」
「そうだったの。でも、あなたのお婆さまは偉いわね。人の罪を敢えて被られるなんって
中々出きることではないわ」
「でも、それが偉いですか。僕は・・・」

純一は顔を下に向けて拳を握り締めて肩が震わせていた。握り締めた手をそっと美樹が握った。翔玲も暖かい眼差しで純一を見ていた。
「あれ、ピョン太君はおやすみね。可愛い寝顔」
ピョン太は体を丸くしてすやすやと寝ていた。翔玲は立ち上がって「さあ、今日は優しい友がきたのでおばさん腕をふるって美味しい物作るんね」
と言って台所へ行った。翔玲とは初めて会うのに前から知り合いだったかのように思えるのが不思議であった。また、こんないい人を苦しめる奴等が憎かった。きっと純一の母麻美をダブらせていたのか、自分には何も出来ないがどうかこの人を助けたいと心の奥から正義感みたいなものが湧いてくるのであった。

純一と美樹は井炉裏に座って、ピョン太は純一の横でス―ス―と鼻息を出して安心しているのか眠っていた。部屋の中は暖かくポカポカして純一も眠たくなったのか大きなあくびをした。時間がゆっくり流れていくよなここは平和で安心の空気が染みている部屋であった。

「美樹の家に入ったときも、おばさんの家にも時計がないけどどうして？」
「それは、意味がないからよ。ここでは」
「例えば何時に会う約束とかしたらどうするの」
「それは、日が沈まない位にきておいてって言うかな」

「えらい適当なんだね」
僕の娑婆世界はそんな適当で済まされない。いや、時計がなければ生きていけない程常に時間との生活であり、それだけ忙しく過ごしているのかなと純一は心の中で呟いた。
「お待ちどうさま。さあ、食べて」
と翔玲が手料理を持ってきた。弁当みたい箱に野菜や肉やを焼いた物が入ってあったり、それがどう言う訳かタコウィンナーが入っていたのには純一は驚いた。

「これて、ここでも作るんだ」
「タコウィンナー。私のお母さんも作ってくれるよ」
純一も母が小学校の遠足にタコウィンナーを入れてくれたことが頭に過ると、母に会いたいと言う思いに胸が苦しい思いに駆られるのであった。次
にご飯は豆ご飯になっていた。
「ワー。グリーンピースご飯だ」
「えーこれって豆ご飯でしょ」美樹が否定するように言った。
「これも美樹の所でも作るんだ。でも、これはグリーンピースご飯なの。僕ちはずっとこう呼んでいたもん」

まるで美菜と口喧嘩しているようだと思い、いつもちょっとしたことでよく美菜と言いやいになって母に怒られていたな、あのときの家庭の様子が蘇ってきて、純一は笑ってしまった。
「でも、この名前いいかもね」
「でしょ。グリーンは何処までも緑が広がって、ピースは平和のブイだよ」純一は右手をブイサインをした。
「おばさんもその名前素敵だと思う。とても幸せになれるような気がするわ」
そのときピョン太がピーピーと泣きだした。
「ピョン太もこの名前気にいたんだ」

皆は大笑いしてこの部屋が新緑に包まれ安らぎの空気が流れているようであった。
「さあ、これ食べると暖まるよ」
翔玲は鉄の鍋に野菜や肉を入れ味噌仕立てにしてある鍋を井炉裏の火鉢に置いた。そのときピョン太も美味しそうな臭い目が覚めて鼻をクンクンさせていた。

「ピョン太ちゃん起きたの。あなたは何を食べれるのかな」
と言って翔玲は器に野菜を切ったものとリンゴを刻んだものを持ってきてピョン太の所においた。ピョン太はその食べ物を臭いをかいて大丈夫と思ったのか食べだした。
「さあ、私達も食べようかな」
翔玲の合図のような声で純一、美樹も食べた。皆は笑い暖かい空気が流れ何処にでもある食卓であった。翔玲の作ってくれた料理は家庭的で優さの臭いがした。この部屋だけ時が止まったような幸せで平和であった。
「もう、お腹一杯だよ」
「男の子はもっとたべなきゃダメよ」
「これ以上食べるとお腹がパンって破裂しちゃうよ」
と僕はお腹を押さえて体を寝そべった。
「純一たっら、食べて寝ると牛になるよ」
「モー。ほら牛になった」
僕は起き上がって両手の人差し指を頭の上に乗せてツノが生えている格好をして見せた。美樹は「嫌だー」と笑い。翔玲もその光景に大きな声を上げて笑っていた。
そのとき玄関のドアがドンドンと誰かが叩く音がした。
「ここを開けろ」

残酷の淵に連れて行かれる

外で大きな声を上げて叫んでいる声であった。
翔玲は顔色が変わった。目で動かないでと言うような凍らせた顔にただ毎ではないと感じられた。純一も美樹、ピョン太も息を潜めて、体が停止した状態になり、咄嗟に死と言うものが頭に浮かんでくるのであった。
翔玲は静かにドアの所に歩いていき、純一は狂う程心臓が鳴り打っていた。発狂乱で声が出そうに恐怖の海に呑み込まれていた。
「どなた様ですか」翔玲はドアを開けずに声だけ出した。
「早くここを開けろ」
荒々し声が響き緊迫な空気が流れた。翔玲は静かにドアを開けた。すると二人の小柄な男が家の中に入ってきた。
「お前の夫は征斗と言う名だな」
「はい。そうですが、夫が何か」
「征斗は脱獄した。それでこっちに帰ってきてないか」
「いいえ。夫は帰ってきていません」
「かくまっていないだろうな。家の中を見させて貰う」
と言って二人の男が家の中を隅から隅と見回った。純一達は何も出来ずに黙って早くこの者達が帰ることを願っていた。

「本当に征斗のことは知らないんだな」
「はい、何も知りません」と翔玲は頷いて言った。
そのときもう一人の男が「何か臭うぞ。これは男性の臭いだ。ここに征斗がきたんだろ」
と怒鳴る声で翔玲を殴る勢いで言うのであった。
「いえ。来ていません。ここには一度も本当です。分かって下さい」
翔玲は声を露わにして純一達を守りらなければいけないと、体を盾にしているように必死で叫びに近い声で男達に訴えていた。

「いや、この臭いは少年や、少女や、動物の臭いではない。成熟した男の臭いだ。おい、嘘を言っているだろう。お前を連れていく」
現行犯のように二人の男に翔玲は引っ張て連れてく。
そのとき咄嗟に純一は「待って何故この人を連れていく」と連れていく男の間に立ち必死で翔玲を助けようとした。

「純一君。私は大丈夫よ。あなたの方が大事だから、これ以上はよしてほしい」
翔玲は凄く冷静に純一に説得させようとした。その瞬間翔玲は二人に腕を掴まれて連れて行かれるのであった。家から外に出ってロープのような物に体を巻かれて「さあ、歩け」と男は唾を吐きかけるよなえらそうな言い方だった。純一は自分に母親が連れて行かれるように泣き叫び「連れていくなーこの人を」男に食い下がっていくのであった。
「そんなにお前も言うなら連れていく」と言って男は純一にロープで体を縛った。純一はもがいていてロープを外そうとしたが、もがけばもがく程にこのロープは体を締め付けるようになっていた。

「止めて下さい。この子には関係ないことで、どうかこの子を離して下さい」
と翔玲は男に縋るように言っていたが、男は無視をして翔玲と純一を連れていくのであった。取り残された美樹は駆け出してきて「純一」と泣きながら叫んでいる。
純一は後ろを振りむこうとすると男が純一を睨み付け純一の足を蹴るのであった。あー美樹もうこれで会えないのか、いや、僕はこいつらに殺されてしまうのか、純一はそう思いながらどこに連れていかれるか分からず歩かさるのであった。

純一と翔玲は男に捕らわれて何もない地平線の草原を歩かされていた。青々と茂る草原にいると、さっきグリーンピースのことを思

い出していた。おばさんがどこまでも続く緑で平和のピースだねって言っていたのが、今は緑の草原を歩いているが平和ではない。人をこうして捕まえて平気で殺していまう奴等は許せない。純一は拳を握り締めて悲しみを堪えていた。この先は本当に殺されるかも知れないのに恐怖はなかった。何故だろうと自分に自問していた。そうかこんなに極限にいるのに怖さを感じれないのは、大切な人を守りたいと思う気持ちが強いからなんだ。おばさんは本当にお母さんのような暖かくてだから僕はこの人が大事なんだ。この人の命を僕が防波堤になって、譬え僕が崩れても助けたい純一は捕らわれの身なのに心は強く叫んでいた。

そうして、純一達は洞窟みたいな所に連れていかれた。そこには負傷した人や、倒れて動けない者が横になっていたり、子供から年寄り男女が大勢いて皆目は虚ろで半分死んでいるような状態で体を潜めていた。

「分かっているな。ここから逃げ出そうとしても何処に逃げても直ぐに分かるようになっている。そう言うことをすれば直ぐに射殺する。いいな」

と言って看視の男は去って行った。純一は殺されると思っていたがどうしてここにあいつ等は置いていったのかよく分からないと当惑するのであった。

「ごめんね。純一君まで巻き込んでしまって、おばさんどうすればいいか」

翔玲は純一の手を握り涙を流した。

「大丈夫です。僕がおばさんを助けるよ。だっておばさんを見ているとお母さんみたいだから僕は・・・・・・」

純一は言葉に詰まりそれ以上のことが言えずにいた。

「ありがとう。おばさんその言葉だけで生きてきてよかったって思

うわ。私は子供を産んでいないから本当の親になったことはないが、でもこうして息子が出来たような気がしてとても嬉しいわ」

二人は明日も知れない命が危ない中で心を温め合っていた。一時の慰めでしかない
のは分かっていたが、それでも不思議に二人の中には通じ合わ何かがあった。

「本当はね。おばさん子供がいたのよ」
「えっ、そうなの」
「でも、産まれて直ぐ連れていかれたわ」
「あの連中に」
「そう。お前の子ではないって」
「それどう言うこと。連れ去る理由はあるの」
「ないわ。言わない何も私はあいつ等にしがみ付いて喚いて「子供返して」と言った。だけど私の体を振り張って子供を連れ去ってしまった。私は悲しくてずっと泣いて泣いていたわ」
「何ってことだよ。じゃ子供は連れ去れままなの」
「そう、もうすでにあいつ等に殺されているかもしれない」
「許せない。何て残酷な事を、こんないい人がこんな悲しい事になるなんて」
「この町は滅びてしまった。何が幸せでなんて、もう分からない。余りにも残酷なことば
かり起きて、私だけじゃない他の人もそうよ。皆、生きることを忘れて死んでいるかのように生きているの」

その時、少し離れた所で負傷して男が横たわって声にならない声で叫んでいた
「苦しい。こんなことなら早く死よ迎えにきてくれ」
純一は他の者を見たとき肩を落とし、ため息を付いいる者、看守に殴られた者は横たわって生きているのか死んでいるのか分からない

様子であった。
「僕は、おばさんを助けるよ。絶対に」
純一は翔玲の手を握った。それはささやかな誓いかもしれないが、純一のように何かを起こそうと生命力を沸かせている者はこの町には誰もいなかった。寧ろ諦めの境地に立つしかない、抵抗すれば殺される。絶対権力の前に何も逆らえない宿命とでも言うのか。悲しい現実があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6272y/

グリンピース

2011年12月15日00時49分発行